

第四回国際山地徒歩大会（国際山歩き大会）に参加して

北京事務所

1 万人が参加する一大山歩きイベントだが外国人集めにはひと苦労

スポーツの秋、快晴に恵まれた9月14日土曜、北京市国際交流協会（以下「交流協会」）のお招きで、片道8キロの遠足部門に参加してきました。翌日も含め2日間にわたるイベントで参加者は合計で1万人、大きな行事です。

国際大会ですから外国人が参加しないと体裁が整わないのですが、100キロ走破の競技部門はともかく、16キロのレクリエーション部門は、交流協会が直前に各国大使館など友好団体等に呼びかけてようやく形式を整えた感じがありました。外国人は、私たちと一緒にバスでやってきた人くらいしか見当たらず、事前の広報の仕方は工夫の余地があると感じました。我々としては、人と人のお付き合いがビジネスの基本である中国において、友好関係を維持したい団体からのお誘いは断らないこと、これが大切です。今回も仕事ではありませんが、せっかくの機会なので参加することに決めました。

事務所の近く北京市の中心市街地からバスに揺られること2時間、ようやくスタート地点に立ちました。前を見ると、すでに多くの参加者がスタートしています。交流協会関係の参加者は約150人、バス5台に分乗してやってきました。



混み合うスタート地点



お世話になった志願者の皆さん

地域住民や学生も志願者（ボランティア）として活躍

沿道には多くの住民の皆さんが出て、私たちに応援してくれ、なんだが何かの大会の選手になったような気分も味わえました。村の中を抜けると、田園風景の続く谷筋のなだらかな登り坂を進んで行きます。沿道の要所要所には警察の方々が交通整理をしてくださり、また2～3キロごとにペットボトルの給水ポイントがあり学生さんや地域の皆さんが「志願者」という名札をつけてボランティアをされていました。特に大学生のボランティアは、「〇〇大学志願者」という名札をつけており、各大学が積極的にボランティア活動への参加を呼びかけていることがうかがえました。大きな行事は、主催者のみならず多くの関係

機関、関係者の皆様のご協力で運営されている様子は日本と同じなんだと思いながらも、普段の運動不足がたたって、だんだんそんなことを考える余裕もなくなってきたころには、勾配が少しずつキツくなってきました。

帰りのバスの時間と距離、自分の体力を考慮して、最短距離の往復16キロのコース。あとは折り返し地点である通称「川底下村」を目指します。

北京にもグリーン・ツーリズム

この村は、明の時代の農村風景を残す村として、「北京で一番美しい村」に選ばれており、旅行ガイドブックにも載っているものの、なかなか訪れる機会がないだけに、山の中腹から谷底まで寺院や家屋が段をなしている風景に、長路の疲れを忘れ、しばし見入っていました。

市内から郊外へ向かうバスの中での「農家泊」とか「農村料理」といった看板を時折目にしましたが、この村にも、いわゆる農家民宿が何軒かある様子で、北京のような大都市では、グリーン・ツーリズムの需要が多くあることも感じました。



川底下村遠景



川底下村内の光景

おわりに

木陰に腰掛けて、コンビニで買ったおにぎりで昼食を済ますと、あとは一気に下るだけ。

帰りのバスは北京名物の渋滞に巻き込まれて、2時間半近くかかって出発点に戻りました。次の日に筋肉痛が出たので、まだまだ自分も捨てたもんじゃないと妙な自信を持たせてくれた山歩き大会でした。

ただ時間制限があったため、歩くことに必死で参加者同士の会話をあまり楽しめなかったことが心残りです。

(平澤次長 兵庫県派遣)